

ある保育の実践から

朴^{パク}

香^{ヒヤン}

俄^ア



羽つきをしている子ども達に加わるつもりで、運動靴をはこうと玄関の廊下に腰かけていた。チューリップ組のU君がとなりに座って、『センセイハ、ナニジン』と尋ねる。私は不思議な質問に少々驚きを覚えながら、「ワタシ・カンコクジンだよ」と答えた。答えと共に彼に、「ボクハ、ナニジン?」と聞くと、「ボク、カンコクジン」と答えてくれた。そうしたら、近くにいた子どもたちが次々と私に、「センセイハ、ナニジン」と聞く。

私は聞かれるたびに、「カンコクジン」だとしつかり答えてはまた問い合わせてみた。子ども達からそれぞれ「ニホンジン」「カンコクジン」と答えが勢い良く返ってきた。その中に「ボクハ、ニンジン」「ボクハ、キャベジン」「アタシハ、ブロッコリジン」などなど、野菜ばたけ国、製菓国出身の子ども達が生まれてきた。

日常生活の言葉がかなり身について生活をする三才頃の子ども達には、連想ゲームのような言葉遊びはとても

楽しいようであった。特にこの「ナニジン」遊びはこの

保育園ではかなりはやった得意な遊びであったことが分

つた。

お昼の給食の時間になつてまたこの遊びが始まった。

私のとなりに座つていた子どもが、「センセイ、ナニジン」と聞き出した。私は子どもたちが、私が韓国人であることをすでに知つていると思ったので、給食の食器に描かれている絵を見ながら、「ワタシハ、コレカラピー

マンジンニナリタイ」と答えた。そうすると誰かが、「アンセンセイ（担任の黄先生）、ナニジン」と聞くと、先生は「ビジン」と答え、保育室の中は笑いが止らなかつた。

この桜本保育園の子ども達は、見学や、実習に来る大人と飽きもせず「ナニジン」遊びを続けていた。自分たちはすでに野菜人になることを考えていたが、その遊びを知らない人の「日本人である、韓国人である」との単純な答えを予想して楽しんでいた。

なぜ、この子ども達は「国籍遊び」をそれほど気にい

っているのだろうか。

▲ 桜本保育園の生い立ち

一九六九年に生まれて今年で一八年目になる桜本保育園は神奈川県川崎市桜本地地区に位置している。この町は韓国と日本の近代の歴史を語る証人のような存在であるし、これからも異国で生きねばならない寄留民たちの生き方ににおける里程標のような存在であるかも知れない。

この町における在日韓国人の定住史は一九一〇年代から京浜工業地帯の発達史、川崎市の発達史と重なり合う部分が多い。

一八八五（明一八）年にはたった一人の留学生が日本に居住していたにすぎなかつたのが、韓日合邦（日韓併合）の前年の一九〇九年には七九〇人に増加し、併合の翌年の一九一一年には二五二七人にのぼつた。朝鮮に武断政策をとり始めた一九二〇年代には三万人を越え、朝鮮文化抹殺のための文化政策を取り始めた一九三〇年代には三〇万弱になつた。第二次世界大戦の開始の前年の

一九四〇年には二二〇万弱、戦争が深まるにつれ、朝鮮徴用令、朝鮮徴兵令が出されて終戦にむかう一九四五五年には二三六万強の人々が朝鮮から渡り、または連れられて来て日本に定住するようになつたのである。^(註1)

これらの人々は様々な仕事をしたり、あるいはさせられたのだが、特に川崎における朝鮮人は京浜工業地帯の創生期の頃より在住し、工場建設のための人夫や土方といった労働に主に従事した^(註2)。今は、一〇〇万人強の川崎市の人口の中では在日韓国人は九千人を占め、外国人登録者の六七万人のうち、相当の韓国人が川崎市に住み、在日韓国人の密集地域を形成している。この町には韓国料理材料店や料理店などが並んでいて異国に住む韓国人にとってはある種のなつかしさなども感じさせてくれる。

しかし、この町は、川崎南部の大工場地帯に隣接しているので、住宅、福祉、公害、教育などに多くの社会的病弊を抱いている地域でもあるのだ。住民の四〇%以上が肉体労働者であり、共働きの多いこの地域で、在日韓国人キリスト者が、日本の中での自分の生き方や、キリスト

ト者としての生き方に目ざめてきた。桜本一丁目に位置している「在日大韓基督教川崎教会」は、キリスト教会の持つ閉鎖的な体質から抜け出し、聖地すなわち教会を地域に開放する作業を、5年間の教員の説得の末、遂行することができた。ついに会堂を開放して、未公認の保育所を開くようになった。

この事業の最も大きい力となつたのは戦後進められた部落解放運動であり、解放運動家による“周辺に住む在日韓国人の問題をきつちりと踏まえないならば、自分たちの解放そのものが偽りではないか”という問い合わせた。本教員たちはこの解放運動に触発されて、人間としての自立、あるいは解放を求めながら部落運動が勝ち得たことを学び取っていくプロセスから、ともに闘い、ともに自由をめざし、ともに新しい地域社会形成を目指して行くようになつた。^(註3)

▲ 教会との関わり

このような自立・人間性回復のための解放運動とともに

に、日本において、在日韓国人が一九〇八年にキリスト

教の宣教を始めてから60年たつことをきっかけに「在日本大韓基督教会総会」から『キリストに従つてこの世界』という主題が出された。それに応えようと考へられたのが、地域に開かれた教会としての保育園の開園であった。

故郷を喪失した「身を寄せて生きる旅の者」すなわち寄留の民である在日韓国人にとっての教会は、被支配、被差別民の韓国同胞を包み込んで慰めや希望を与える役割を果した。又、在日韓国・朝鮮人として生まれ、存在することと自体が、理由のない否定的「負」のくびきを負うという、この日本の地で生まれ育った二世、三世、四世に、自分自身を発見する驚異を提供する場でもある。

というのは、神の前において相対的である各民族・各文化はそれぞれ同じ価値体系を持っているので、自己隠蔽をせずに正々堂々と自由語で語り、賛美し、祈り合うことによって、民族の自主性、人間としての主体性の回復が行われる。このような体験談は在日韓国人同胞の社

会ではよく耳にすることである。

宣教の基本的課題として、福音伝道と民族の抑圧からの解放、あるいは別の言葉で信仰と愛を全体的に捉え直す。そして、イエスの宣教に倣い、教会の三つの聖務、「伝道」「教育」「奉仕」の領域を設定し、宣教の展開する具体案(註4)として、教会を開拓して地域に奉仕し、放置されがちな子ども達の養護や教育によつて神の愛を伝道すること、これが本教会の方針であるのだ。

開園当初は、園長（川崎教会牧師）と保母三人で三〇人の日本人の子どもと四人の韓国人の子どもをむかえて保育をはじめた。

▲ 自立の契機

が、初めの頃は教会の聖務の遂行とは言え、子ども達を預かることがこの地域の人々に奉仕して行くことと考へていた職員自身には、韓国人である自覚や、地域の子ども達を教育するという目的意識はなく、保育の方向性も全くなかつたのである。

しかし、一九七〇年一二月、一在日韓国人青年、朴鐘碩君の提起した問題^(註5)は、韓国人が韓国人として生きられる契機を与えてくれた。

本件は、日立製作所の入社試験を受け合格通知を受け取ったにもかかわらず、採用を取り消されたケースで、民族差別による不当なものだとして横浜地裁に提訴された事件である。日立製作所は、「当社では一般外国人は雇わない方針だ。最初から本当のこととを言っていたらこんなことにはならなかつた」と理由をつけて解雇した。

その「本当のこと」というのは、試験当時の名前の「新井」というのが、本名は朴であることと、本籍が韓国のある町となつていることをさすのであるが、「日本名を名のり、日本人のように育つことを要求する」日本の社会が、「本当のこと」を言つていたならば受け入れてくれるだろうか。受験資格を与えてもらえただろうか。もし、朴君が本当のことを言つていたならば、就職における民族差別は起らず、誰も気づかず、何ということなく終つてしまつていただろう。

しかし、本件は、やっても仕方のないことをやろうとするのか、日本の社会を糾弾したら必ずそれは自分たちに返されるからやめるべきだ、などの在日韓国人社会からの批判を受けながら、本教会の牧師(保育園園長)、教会青年、差別闘争に同調する日本人弁護士や朝鮮人問題専門の特別弁護人、「朴君を囲む会」などの四年間の闘いで、民族差別に対して徹底的に闘うことは正当であるという観点に流れを変えさせ、日立が謝罪し、勝訴となって、朴君も入社できることで解決した。

最初、日本人と違わないのに差別されたとして提訴した朴君は、裁判が進むにしたがい、実はこの問題は在日同胞全体の問題であり、在日韓国人としての生き方が問われているのだと気づいてからは、何度も裁判を止めてしまいたい、法廷から逃げ出したいと思ったことであろう。しかし、自分の名前も「新井鐘司」としてしか知らなかつた朴君は、最後には自分に打ち克ち、法廷でこのように言い切つた。「この裁判に勝訴するか、敗訴するか、それはわからない。……この裁判を契機として、ぼ

くは失っていた民族の魂を取り戻し、朝鮮人として生きて行こうと決意することができた。それがぼくにとって最高の勝利だと思う」と言い、「ある意味では、このよう私を成長させる契機をつくれた日立に、すこしばかり感謝したい気もする」と宣言するに至ったのである。

一方、この闘いに参加した人々の意識の中には、もう一つの取組みがあった。今日まで日本に生きながら、自分たちの後輩が地域でどのように育ってきたか、育つていかが、十分注目してきたかという反省が起つた。そして、自分たちの成長の過程で日本の社会から受けたさまざまな差別が、今の子ども達の姿になって見えてきて、その帰結として、地域の中に入つて同胞が抱いている問題を担うことになつたのである。

「生きる」意識の目覚めによって、韓国人の保母や子ども達に園の方針として、本名を名のらせた。又、偶然『キリスト教保育』という雑誌に、「^(註6) サンヌン・オルダル(笑顔)」「^(サンアシ) 舎アジ(子牛)」という韓国の子どもの歌が載つているのを知り、それをきっかけに韓国語の歌を教えたり、いくつかの日常会話も口にするようになった。保育者達は、朝鮮という言葉に植えつけられている「汚いもの」というイメージをぬぐいさるために、韓国文化に触れさせ、良いイメージを与えていくことを話し合うこともあつた。

このように保育内容における韓国文化・言語の導入を行つ一方、子どもの教育よりも切実に保護者達の考え方を変える必要性を感じた。一世の価値意識の中ですでに、日本の植民地支配の時代から身につけた同化教育、天皇制のわくのもとで天皇の赤子にされていくという、価値意識が植え込まれてゐるし、戦後生まれ育つた世代の意識の中では、朝鮮といふものはダメなもの、日本というものがマシであるという観念が定着していいる中で、

▲ 保育園での取組み^(註6)

開園当時は、物理的に韓国人と日本人がいることでの「國際性」が強調されるのみであったが、「韓国人とし

いくら園の方針であつても「本名使い」「韓国文化導入」は受け入れてもらえないものであった。そして、同胞子弟の教育と父母の日頃の悩みを語る場として、一九七〇年に「同胞父母の会」が開かれた。

まさに、意識の目ざめや模索期とも言える無認可の一九七四年までは、親や保育者たちにとつては自分との闘いの時期でもあったと言える。

公式認可後には韓国人の子ども達が増え、同胞子弟の教育の再考を行つた。韓国語の挨拶を知り、文化を知ることは、同じ地域に自分とは異なる人々が実在しているのに、それを見ようとなかった日本人子弟にとって、隣国を知り、両国間の正しい歴史を知る上で、役に立つたかも知れない。しかし、そのような微々たるもののが同胞の子どもには、どれほどの力になりえたのかを考えた時、同胞子弟のための「韓国人クラス」を偏成し、相互の教育を深めていくことが必要であるまいかと考え、保育園舎の新築後にそれが実現されることとなつた。

四・五才児に限つて、「韓国人クラス」を^{サンクル}つづじ組と名

づけ、「日本人クラス」をひまわり組と名づけて偏成した。その時、朴君の「就職闘争」を支援していた保育者達も、日本社会を生きる重みを改めて受け止め、意識化された自分を見つめながら、チンタルレ組という韓国人クラスに全力投球した。

カリキュラムも充実されて行き、遊びの中で韓国の言葉、伝統文化、地理、歴史、音楽などの様々な要素を取り入れ、子ども達に正しい民族的自覚を持たせようと努力した。又、保育者の一人を韓国に留学させ、実際に韓国の子ども達に触れ、遊びや歌、言葉を学び、在日の同胞子弟に韓国文化を伝えることを図つたこともある。

一方、日本人クラスのひまわり組にも、誤った朝鮮認識をもつようになる前に、隣りの国を正しく知り、差別をしない、させない日本人子女として育つてほしいという念願で、ハングル、チマ・チョゴリ、歌、民謡、劇、遊びなどを保育内容として取り入れた。

又、創立以来、キリスト教精神に従つての障害児保育も、同じ時空間を共に生きていく積極的な取り組みか

ら、一九七五年には措置児として二人を園に迎えた。

このように、韓国人の子ども達には民族的誇りや矜持

をもつて育つていくよう助け、日本人の子どもには隣国

を正しく理解し、ありのままの人間を差別なき目で認め、協力し合う人間づくりに励んだ。また障害をもつている子ども達も、同じ人格をもつた人間として、同じ地域で生活する生活者の姿として、ありのまま認めてもらうこと、生活するものとして生きていく彼らを助けることを、本園は尽力してきた。

しかし、比率的に韓国人子女が少なくなり、日本人保育者が圧倒的に多くなってきた一九八〇年初期からは、韓国人のための保育という狭い意味でなく、多くの問題——差別問題、障害児問題、公害問題——の残された地域とともに生き、日本人と韓国人が役割を分担し合いながら、問題の解決を目指そうという広い意味での統合保育を目標にした。すなわち、園での共同生活体験が重要視され、韓国人クラス、日本人クラスは姿を消し、混合クラスとなつて、「共に生きる」体験教育・保育へと発展し、実践されている。

▲ 地域に根をはる

昔の韓国を象徴していた“青い丘”——青丘——は、多くの問題を抱いている桜本地区における、希望を与える丘として成立して、一九七四年に保育園を母体として社会福祉法人青丘社を設立した。

青丘社は、桜本保育園を中心とした幼児教育を担当するだけでなく、卒園後の子ども達を見守る会として、小学生部、中学生部、高校生部があつて、保育園児七〇人を含めて、一九八六年青丘社児童数は合計一六一名であり、その中で韓国と日本人の子どもがそれぞれ五二対一〇九名の比率を成している。

これらの子ども達は、韓国文化にも触れながら、学習会、キャンプなどの行事をもつて、青丘社を自分たちの成長の場として構築している。又、スタッフ達は、子ども達の勉強をみてあげたり、一人一人の悩みを聞いてあげたり、父母との接触、話し合いをして、常にこの地域

で人間らしく生きることへの助けになれるようになると努めている。その他にも、この地域的基盤の中から、児童手

当、公害住宅の問題、銀行融資問題を解決したり、本社の「人権を守る会」では、外国人登録法による指紋押捺問題の解決のために奮闘している。又、川崎市教育委員会と協力して、公教育の場での「川崎市在日外国人教育基本方針」を作り、川崎市の小中高等学校で人権尊重教育が行われることを訴えてきた。

その上、ささやかなこととして、保育園の運動会などで披露する、保育園児、青丘社の学童クラブの子ども達、母親達の民族舞踊や農楽などは、地域のまつりのような盛り上がりを見せていて、日本の子どもも韓国の子どもも、韓国の民族衣装を着て、跳ねたり、飛んだり、踊ったり、楽器を鳴らしたり、太鼓を叩いたり、農楽帽子を回したり、同じ地の土にしつかり立って、一つの心になっている。そんな子ども達を眺めることは、何と素晴らしいことであろう。きっと、その場を共にしていた人は誰でも、そこには憎み合うことなく、あふれる程の

▲ 保育実践を振り返る

在外韓国人の教育に関心を持つていた私は、見学をかねて保育に参加したことがあった。日常の保育は一般的の日本の保育園と変わらないが、少しばかり保育を通して大人の理念や園の方針をかい間見ることができた。

本園の根源的なテーマである人間のアイデンティティ確立のための闘いは、子ども達の「ナニジン」遊びに投影されているような気がする。

「あなた」と「私」は、「韓国人」「日本人」のように違うけれども、同じ場において、同じ息を吸い、同じ貴重な体験をすることは、あなたと私が真心を通い合わせながら生きる契機を与えてくれる。

青い丘にいた子ども達は、知らず知らず国籍の違う他人と共にいる体験を通して、人間の源点に戻り、根本的な人間の出発点を見つけていた。

こちんまりとした青い丘には、ニンジン、ブロッコ

リ、ピーマン、白菜、大根等々が仲良く、同じ大地に根

を下し、それぞれの個性をのびのびと伸ばしているよう

である。

最後に、世界をあげても例の少ないであろう、この保

育実践は多くのことを私に教えてくれた。

子ども達の明快で軽い足音には、過去の歴史、今の社会状況などが暗く響きを残している。長く述べてきた本保育園だけのことではない。或る時、或る場で行われる

それぞれの保育は、過去の重い荷を背負い、直に過去となる現在に責任を持ちながら、未来に生きる子どものために、同じく楽しみ、同じく苦心している。
本保育園の主任保母さんはいつも、「ここは何もないですよ」という。

まさにそうかも知れない。

子どもと一緒にいること以外は、何も特別な意味などをもつ必要がないかも知れない。

(お茶の水女子大学大学院)

〈註〉

(1) 数字は内務省警保局調査より

(2) 青丘社「青少年問題調査研究報告書」一九八五

(3) 青丘社桜本保育園「桜本保育園の歩みから」고개第二集、一九七四

(4) 李仁夏「寄留の民の神学への一考察」下『福音と世界』一九八五、九月号

(5) 朴君を開む会『民族差別』参照、亞紀書房、一九七四
(6) 青丘社桜本保育園、一九七四「共に生きる」一九八四参考

年	園児数			保母数			無認可
	合計	韓	日	合計	韓	日	
1969	34	4	30	3	3	0	
'71	56	13	43	3	3	0	
'73	66	26	40	5	4	1	
'74	81	49	32	7	6	1	認可
'76	77	43	34	9	8	1	
'78	70	34	36	8	6	2	
'80	70	35	35	10	8	2	
'82	71	31	40	10	6	4	
'84	70	34	36	11	4	7	
'86	70	34	36	11	2	9	

(教会公同議会より)